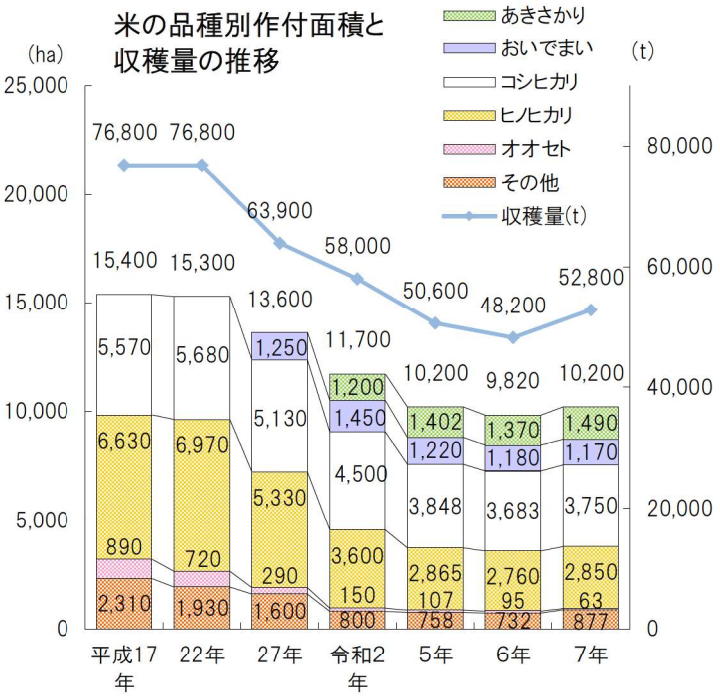
4．農産物の生産と流通の現状

①　米・麦・大豆

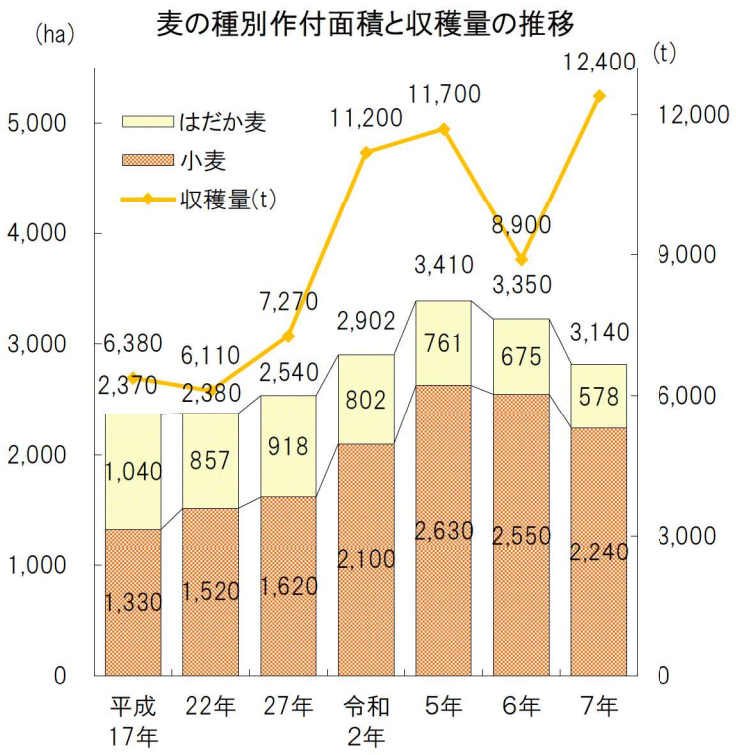
○　米

米が農業産出額に占める割合は、16%（令和６年）であり、本県農業の基幹作物であるが、作付面積は減少しており、令和７年産の子実用水稲の作付面積は、10,200ha（うち主食用米は 10,100ha）となった。

商品性の高い良質米生産のため、品種別の作付計画を策定し、地域の条件に応じた良食味品種への誘導・作付維持を推進しており、作付面積の内訳は、消費者に人気の高い「コシヒカリ」が全体の 37%、「ヒノヒカリ」が 28%、「あきさかり」が 15%であった。このほか品質･食味が良い県育成品種の「おいでまい」については、実需者や消費者の評価を確認しながら作付維持を図っている。



資料：農林水産省「作物統計調査」、農業生産流通



資料：農林水産省「作物統計調査」
（注）大麦の数値を表示していないため、項目ごとの作付面積の計と全体面積は一致しない。

○　麦

本県の麦は、水田裏作の基幹作物として古くからその栽培が盛んであり、令和７年産の収穫量は 12,400t（小麦 8,760t、はだか麦 2,230t、その他麦 1,440t）であった。現在、小麦「さぬきの夢 2009」は主にさぬきうどんの原料として、県内業者に約５割を販売している。「さぬきの夢 2009」は単収、加工適性とも、それまでの「さぬきの夢 2000」より優れており、平成 24 年播きから全面的に切り替えた。

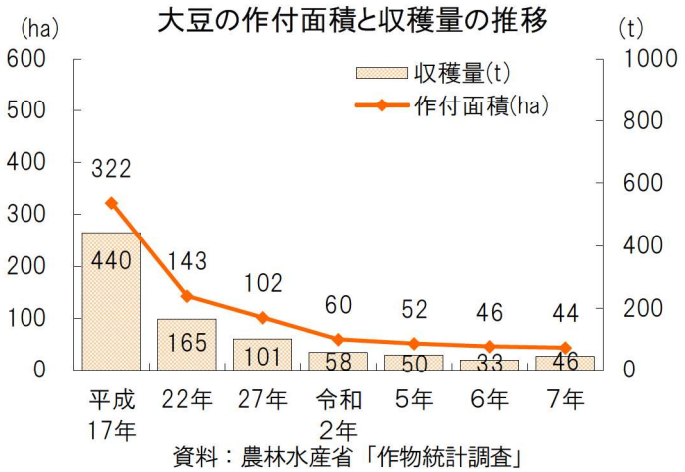
一方、はだか麦「イチバンボシ」は麦味噌や麦茶などの原料として、県内業者に約６割を販売している。

両麦とも生産量･品質の安定化が求められているが、麦は、他の作物に比べて作柄が不安定な面があるため、基本栽培技術の徹底による生産量の安定や品質の向上を図るなど、実需者ニーズに即した生産に努めるとともに、低コスト化・省力化栽培を行い、農業経営の安定につながるよう生産振興を図っている。

○　大豆

本県の大豆は、古くは畦畔大豆や畑作大豆が主体であったが、水田利用再編対策が始まった昭和 53 年以降、水田での転作大豆が主流となり、昭和 57 年には、作付面積 1,610ha まで増えたが、規模の零細性や、生産性の低迷により作付面積は減少し、令和７年は 44ha となった。

主に「フクユタカ」「香川黒１号」が県内全域で普及しており、「フクユタカ」は、機械化一貫体系等の取り組み、「香川黒１号」はブランド化による産地の育成を図っている。



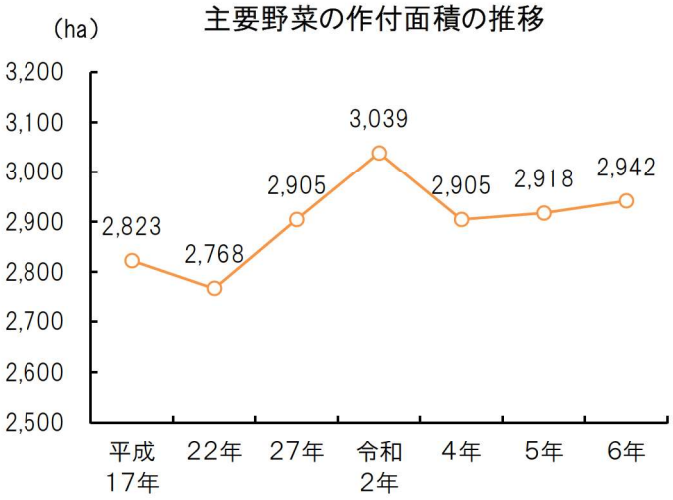
資料：農林水産省「作物統計調査」

②　野菜

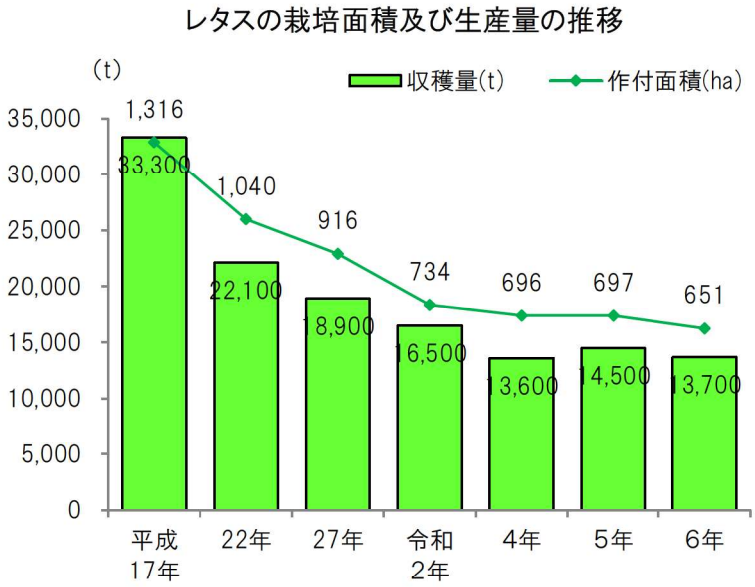
本県の野菜は、水田裏作を主体とした輸送園芸産地として発展し、野菜指定産地を中心に主産地が形成されている。主要野菜の令和６年の作付面積は 2,942ha で、令和元年までは消費の多様化等を反映して堅調な増加を見せていたブロッコリーの面積拡大が鈍化したことや多くの管理労力を要するレタスや重量野菜のタマネギの減少が大きいことから、面積は維持傾向である。

露地野菜のブロッコリー、ねぎでは、省力化のため農協による調製･選別などの作業支援体制の整備などが進められており、施設野菜のいちごでは、養液栽培の導入により生産性の向上が図られている。

農業産出額（令和６年）に占める野菜（いも類を含む）の割合は 31.2%と第１位で、本県農業の主要部門となっている。



資料：農林水産省「作物統計調査」



資料：農林水産省「作物統計調査」

○　レタス

レタスは、昭和 35 年にかぼちゃの前作として導入されたのが産地化の始まりで、平成６年には省力化により作付面積が 1,550ha に達したが、農家の高齢化等により近年は減少傾向にある。

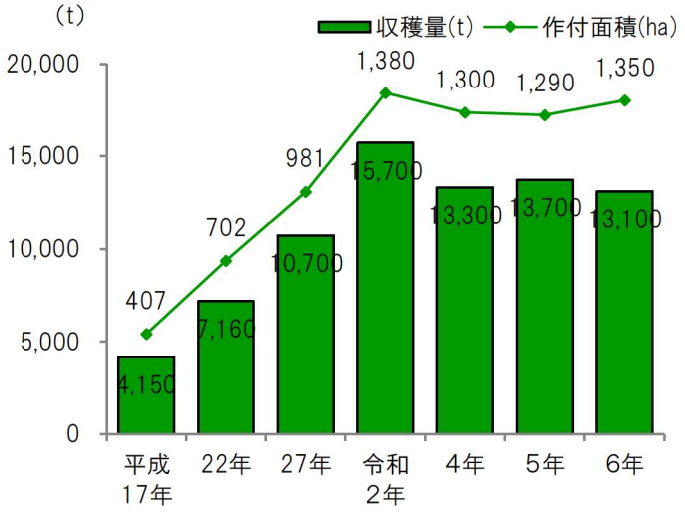
本県野菜の中で重要な品目のひとつで、11 月～３月の東京市場での占有率は 10%となっており、省力化や規模拡大、流通体制の確立などを推進している。

○　ブロッコリー

ブロッコリーは、昭和 40 年代から栽培が始まり、米国からの輸入の増加で一時作付面積が減少したが、近年は出荷作業の支援などにより作付面積、生産量ともに増加し、令和６年の作付面積は 1,350ha で全国２位となっている。

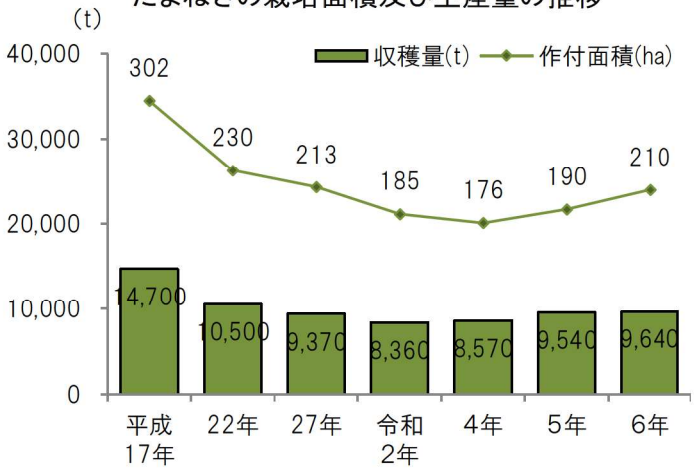
他県での栽培面積の増加による価格の低下などから、面積拡大が鈍化したが、作業支援などによる規模拡大と生産者数の増加を推進している。

ブロッコリーの栽培面積及び生産量の推移



資料：農林水産省「作物統計調査」

たまねぎの栽培面積及び生産量の推移



資料：農林水産省「作物統計調査」

○　たまねぎ

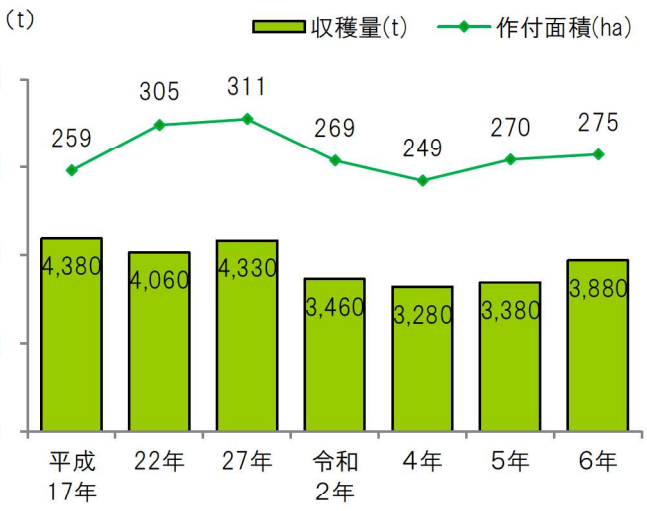
たまねぎは、昭和 30 年代に作付面積が急激に伸び、昭和 53 年には 1,200ha に達したが、農家の高齢化等により減少した。ここ数年は価格が上昇したことから面積が拡大している。

県域で選果場を一元集約化し、販売の強化を進めている。主に関東方面へ出荷されている。

○　ねぎ

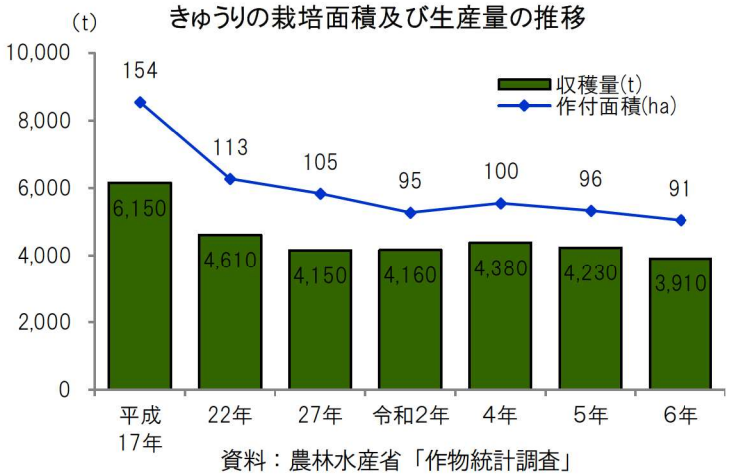
ねぎは、地場市場向けに栽培されていたところ、平成元年ごろから京阪神市場向けの産地形成が進み、平成 24 年には 327ha まで増加したものの、農家の高齢化等により、現在は横ばい傾向にある。軽量であるため、女性や高齢者など幅広い担い手が栽培しており、省力化や規模拡大の推進、鮮度保持対策などの高品質化を進めている。

ねぎの栽培面積及び生産量の推移



資料：農林水産省「作物統計調査」

きゅうりの栽培面積及び生産量の推移



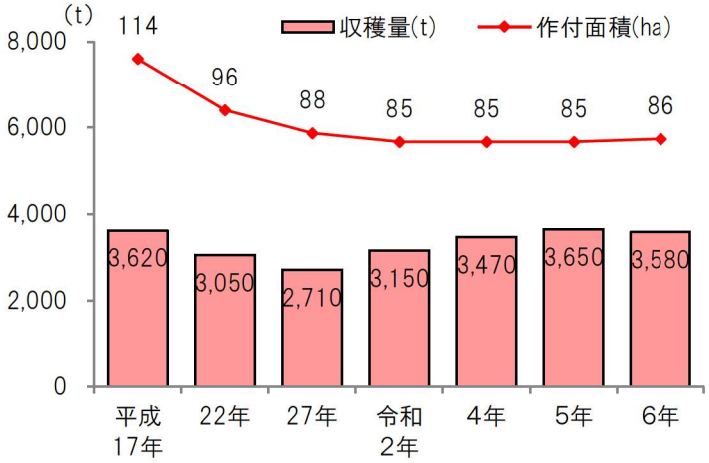
資料：農林水産省「作物統計調査」

○　きゅうり

きゅうりは、昭和 30 年代のビニールハウスの普及などにより作付面積が増加し、昭和 58 年には 478ha となったが、その後減少し、現在は横ばい傾向にある。

生産量の拡大や高温期の品質向上が課題であり、作業の省力化、鮮度保持対策などを進めている。

いちごの栽培面積及び生産量の推移



○　いちご

いちごは、昭和 40 年代のビニールハウスの普及で急速に増加し、昭和 54 年には作付面積が 344ha に達した。その後、農家の高齢化などにより減少傾向にあったが「らくちん栽培」などの新技術の開発や県育成品種「さぬき姫」の導入により面積を維持している。

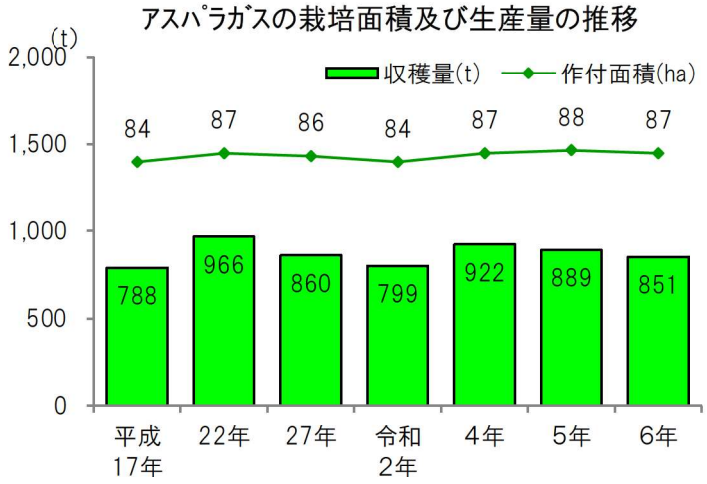
主な品種は、「さぬき姫」「女峰」。

○　アスパラガス

アスパラガスは、昭和 45 年に導入され、女性や高齢者にも栽培しやすい軽量品目として、昭和 61 年には作付面積が 224ha まで増加したが、その後は病害により露地での栽培が難しくなったことから減少し、現在は横ばい傾向にある。

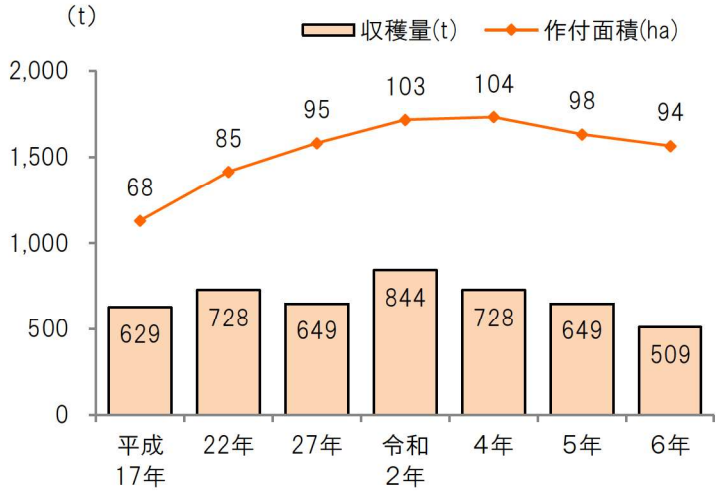
県育成品種「さぬきのめざめ」や独自の栽培法である「かがわ型アスパラガス栽培」の導入により、産地が活性化している。「さぬきのめざめ」の作付推進や鮮度保持対策を進めている。

ｱｽﾊﾟﾗｶﾞｽの栽培面積及び生産量の推移



資料：農林水産省「作物統計調査」

にんにくの栽培面積及び生産量の推移



○　にんにく

にんにくは、昭和初期に善通寺市で栽培が始まり、昭和 59 年には作付面積が 327ha まで増加したが、輸入の増加や高齢化により大幅に減少した。ここ数年は国内の需要はあるものの、温暖化の影響等により生産が不安定となり、作付面積が減少している。

本県の生産量は青森県、北海道に次いで３位で、５月～７月の東京市場での占有率は 13%となっており、省力化や高品質生産を推進している。

③　野菜の出荷状況

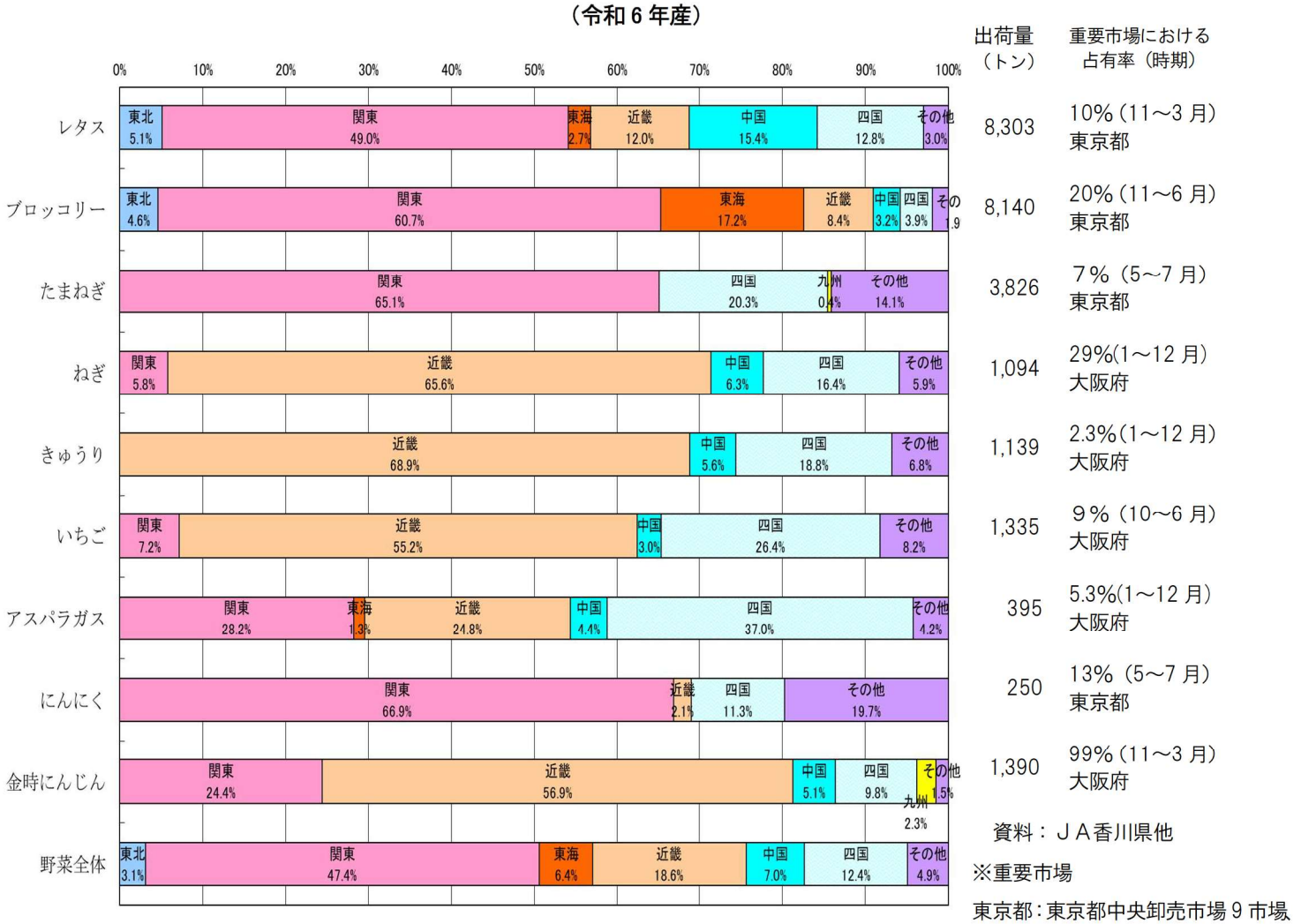
令和６年における本県の主要野菜の総出荷量は 25,871t である。

出荷先は、品目によって差はあるものの、大消費地への出荷割合が高くなっている。野菜全体では、関東地域が 47.4%と最も高く、次いで近畿地域の 18.6%となっている。

一方、県内の主要市場における本県野菜の占める割合は約 26%であり、近年増加傾向にある。

本県主要野菜の出荷地域別割合

（令和 6 年産）



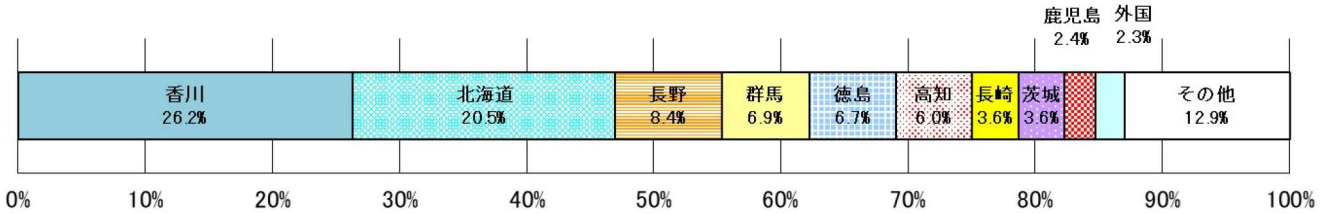
資料：ＪＡ香川県他

※重要市場

東京都：東京都中央卸売市場 9 市場

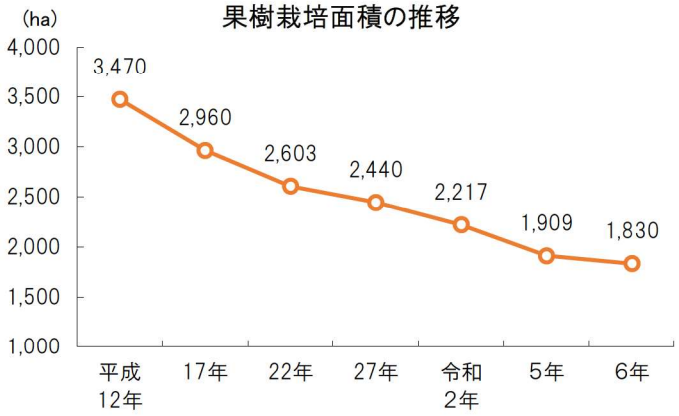
大阪府：大阪府中央卸売市場 3 市場

野菜の県内市場への産地別入荷割合（令和6年・高松市中央卸売市場）



資料：高松市中央卸売市場年報

④　果樹



資料：農林水産省「作物統計調査」
※主要果樹：政令指定品目

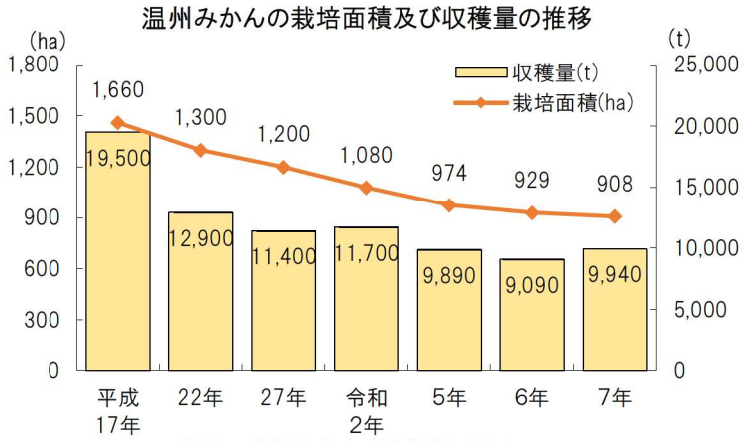
本県の果樹は、傾斜地の畑作地帯における基幹作物として、多彩な品目が栽培されている。主要品目は、温州みかん、もも、かき、ぶどうの４品目であり、令和６年における主要果樹の栽培面積は1,830ha である。

本県の温暖・少雨な瀬戸内式気候を生かした高品質な果実が生産されているほか、オリジナル性のある品種や技術を生かした特色ある産地づくりに取り組んでいる。出荷先については、品目によって差があるものの、京浜及び京阪神市場などの県外市場が約６割となっている。

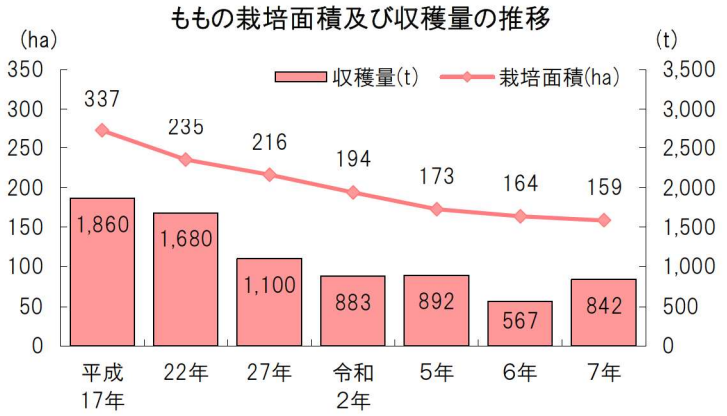
○　温州みかん

温州みかんは、令和７年の栽培面積が 908ha と減少傾向にあるが、本県の果樹栽培面積の約半分を占めている。

濃紅色の果皮が特徴の「小原紅早生」や袋かけ栽培など、特徴のある品種の作付や高品質化の推進、省力化、園地整備などを進めている。



資料：農林水産省「作物統計調査」



資料：農林水産省「作物統計調査」

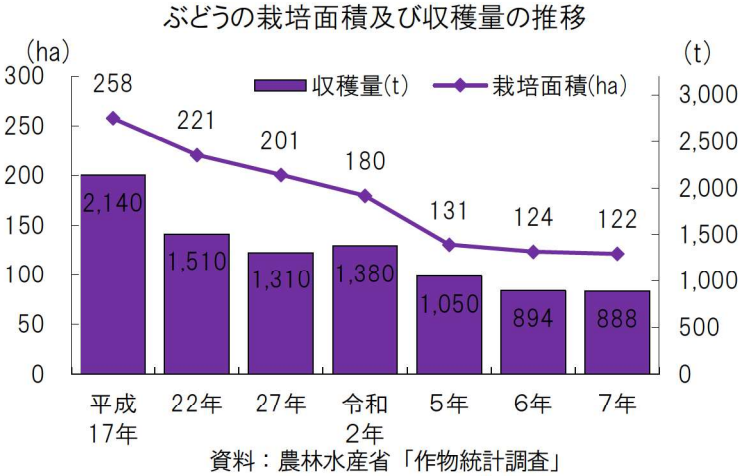
○　もも

ももは、明治 11 年より栽培が始まり、高品質であるため一時は岡山と肩を並べるほど栽培が盛んであったが、近年は横ばい傾向にあり、令和７年の栽培面積は 159ha である。東日本産地との競合回避のため、早生及び中生品種の割合が高くなっている。

○　ぶどう

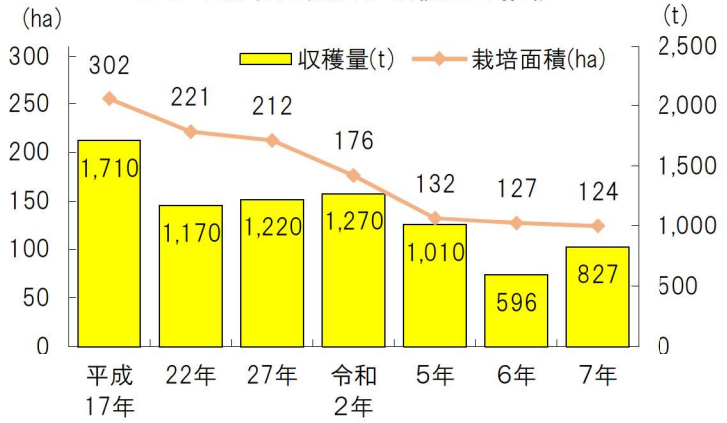
ぶどうは、明治 30 年に導入され、昭和 40 年から 55 年頃をピークに栽培面積は減少し、令和７年の栽培面積は 122ha となっている。

「ピオーネ」や「デラウェア」など各地域で特色のある品種が栽培されている。主要品種である「ピオーネ」や皮ごと食べられる「シャインマスカット」への改植や施設栽培などを推進している。



資料：農林水産省「作物統計調査」

かきの栽培面積及び収穫量の推移



資料：農林水産省「作物統計調査」

○　かき

かきは、昭和 40 年代後半頃から本格的な生産が始まったが、近年は生産量の増減が大きく、やや不安定になっている。

糖度が高く日持ち性が良い「富有」を中心に栽培されており、贈答時期には樹上で完熟させた「袋かけ柿」が出荷され、市場で高い評価を得ている。

また、食味や外観に特徴のある「太秋」や「早秋」なども推進している。

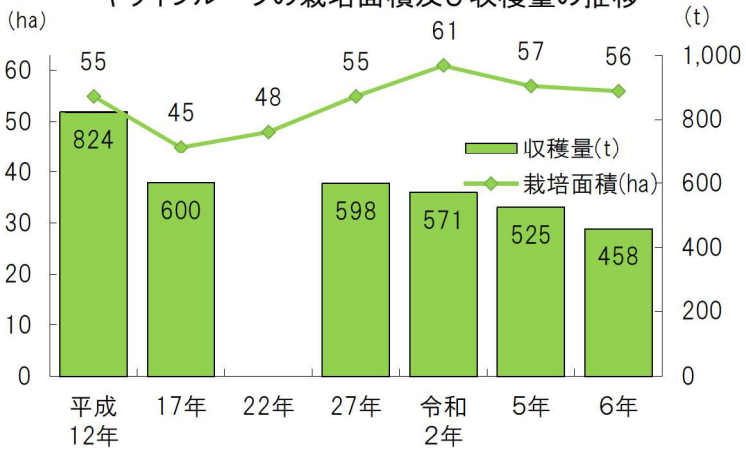
○　キウイフルーツ

キウイフルーツは、令和６年の栽培面積が 52ha で、近年は横ばい傾向となっている。

品種育成の先進県として、これまでに「香緑」「さぬきゴールド」「さぬきエンジェルスイート」「香川 UP-キ１～５号」※等を品種登録しており、特に高糖度の果実を香緑では「スイート 16」、さぬきゴールドでは「黄様（おうさま）」の商品名で、ブランド品として出荷し、市場などから高い評価を得ている。また、新たに育成した「さぬきエメラルド」は、糖度が高く貯蔵性に優れており、早期普及に取り組んでいる。

※「香川 UP-キ１～５号」は「さぬきキウイっこ®」として商標登録している。

キウイフルーツの栽培面積及び収穫量の推移

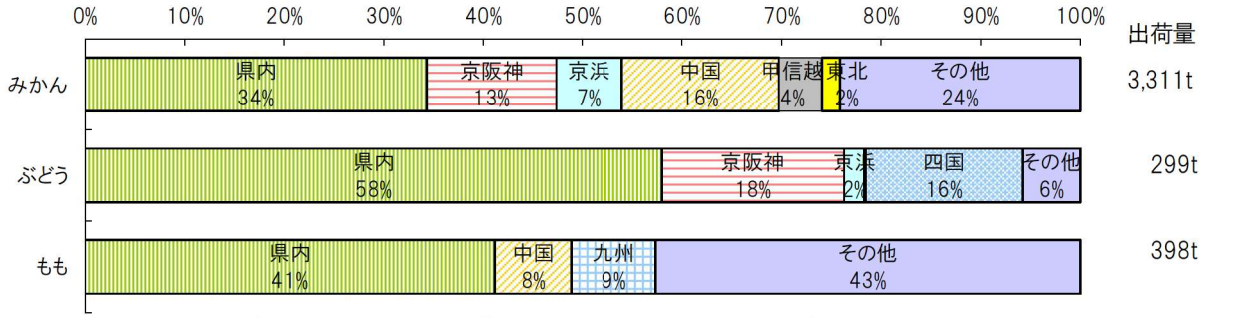


資料：農林水産省「耕地及び作付面積統計」
※平成 22 年は収穫量の公表数値なし

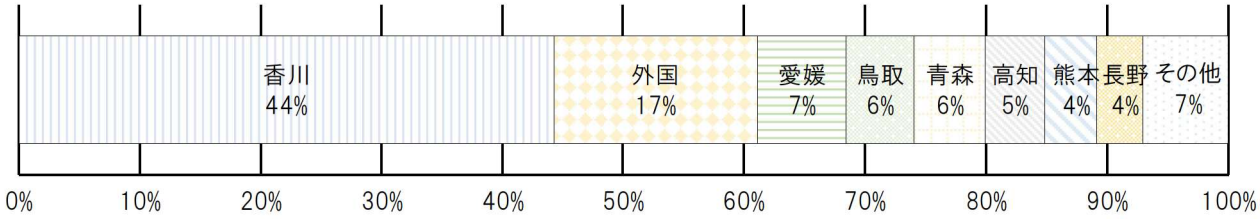
⑤　果樹の出荷状況

令和６年の主要品目（温州みかん、ぶどう、もも）の JA 扱いによる出荷量は 4,008t で、いずれも県外向けの出荷が多くなっている。県内主要市場における令和６年の県産果実の入荷割合は 44%となっており、近年増加傾向になっている。

本県主要果樹の出荷地域別割合（令和6年産）



果樹の県内市場への産地別入荷割合（令和6年・高松市中央卸売市場）



資料：JA 香川県

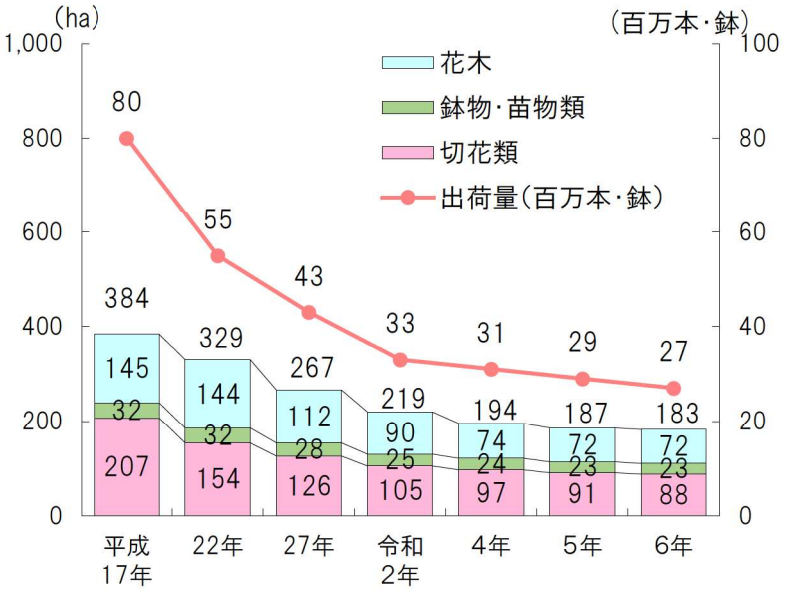
⑥　花き

本県の花きは、きくやカーネーションなどの施設花きと、伝統園芸である盆栽を中心に発展してきた。切花類については、施設化率が栽培面積の 51%（令和６年）と高く、集約性の高い部門となっている。

近年の品目別の生産動向をみると、消費者ニーズの多様化から、ラナンキュラスが増加傾向にあり、多品目化が進んでいる。

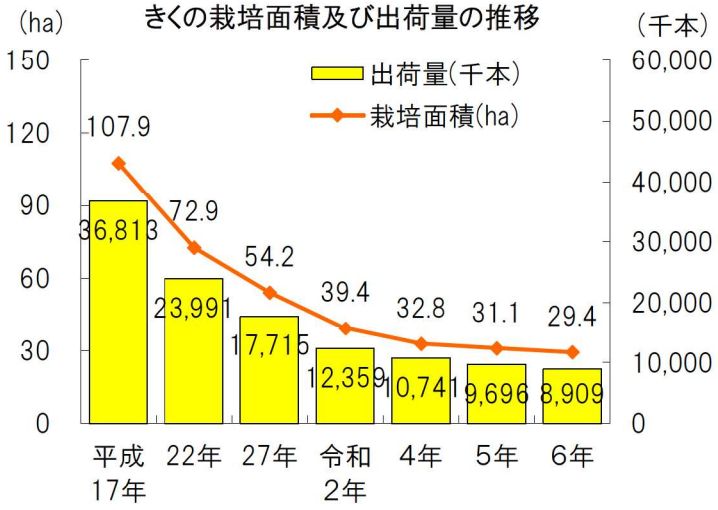
栽培面積は、昭和 62 年をピークに減少傾向にあり、令和６年は 183ha となっており、きく、カーネーション、マーガレット、ひまわり、盆栽の主要５品目で、栽培面積の 29%を占めている。産出額は経済成長とともに鉢物類を中心に伸び、平成３年に約 81 億円となったが、その後は減少し、近年はほぼ横ばいで推移しており、令和６年は約 25 億円となっている。

花きの品目ごと栽培面積と出荷量の推移



資料：農業生産流通課「花き産業振興総合調査」

きくの栽培面積及び出荷量の推移



資料：農業生産流通課「花き産業振興総合調査」

○　きく

きくは、令和６年の栽培面積が 29ha、出荷額が約５億円で、切花類の栽培面積の 33%を占め、本県を代表する花きとなっている。

燃油価格高騰の影響や後継者不足等により、出荷量、栽培面積ともに減少傾向にあるため、優良品種の導入などによる品質の向上、新技術の導入による生産性の向上、新たな商材の開発、物流の効率化などを推進している。

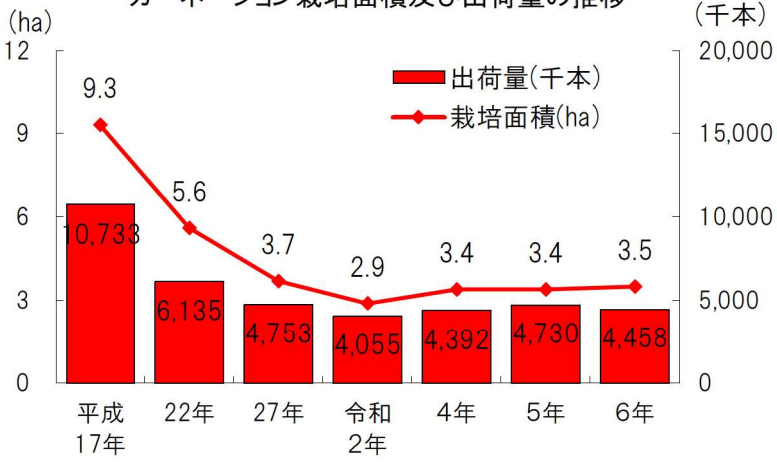
○　カーネーション

カーネーションは、昭和６年頃に露地栽培を行ったのが始まりで、現在ではほぼ全て温室などの施設で栽培されている。

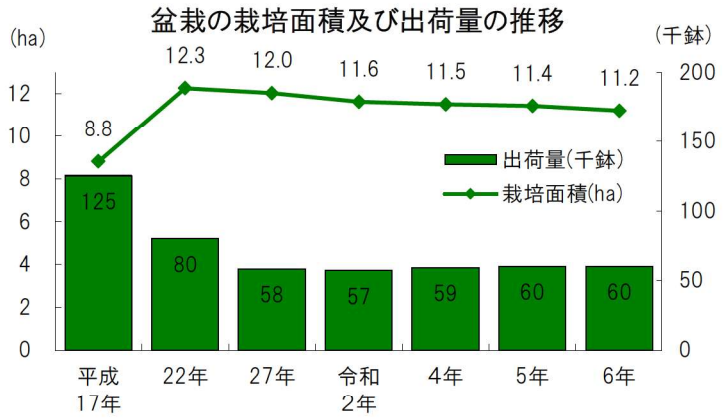
令和６年の栽培面積は 3.5ha、出荷額は約３億円で、切花ではきくに次ぐ出荷額となっており、生産コスト低減対策や日持ち性の向上などに取り組んでいる。

また、県オリジナル品種「ミニティアラ」シリーズはこれまでにない花形が市場などから高い評価を得ており、ラインナップの充実を図っている。

カーネーション栽培面積及び出荷量の推移



資料：農業生産流通課「花き産業振興総合調査」



資料：農業生産流通課「花き産業振興総合調査」
※平成 20 年までの面積は農家庭先の棚場面積

○　盆栽

盆栽は、令和６年の栽培面積が 11.2ha、出荷額が約２億円であり、主に高松市で栽培されている。

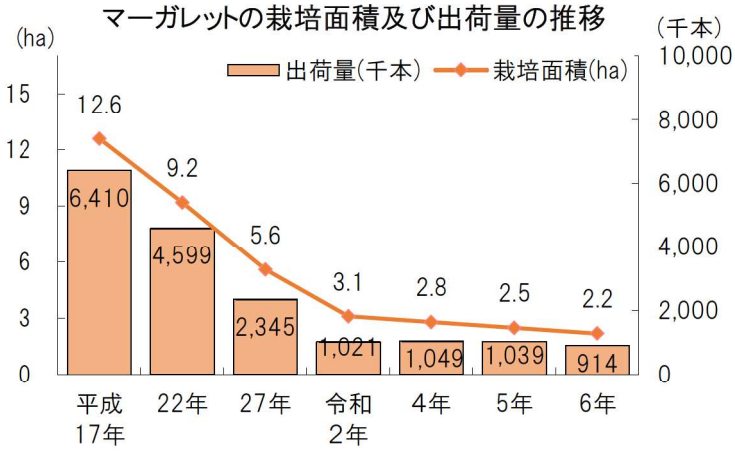
盆栽の国内需要の低迷や担い手不足、盆栽の苗木不足等が懸念される一方、海外では盆栽需要が高まっており、高松市と連携しながら、国内需要の拡大、輸出の振興、産地基盤の強化、交流拠点施設「高松盆栽の郷」を核とした産地振興や地域の賑わいづくりを進めている。

○　マーガレット

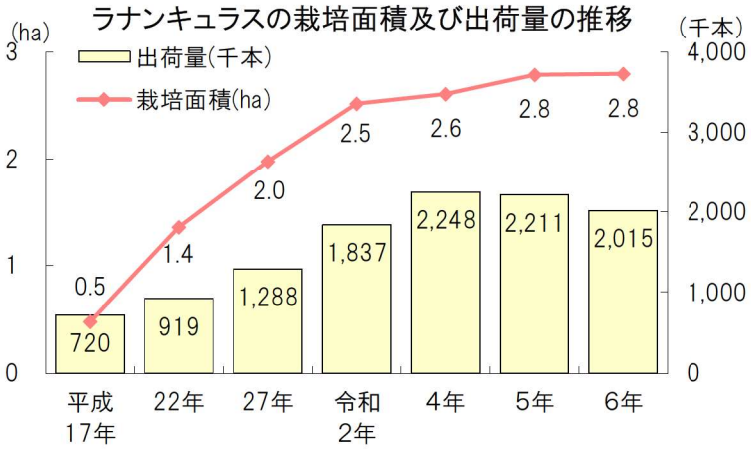
マーガレットは、栽培面積が減少傾向にあるものの、令和５年の出荷量は全国第１位となっている。

令和６年の栽培面積は 2.2ha、出荷額は約５千万円で、主に三豊市で栽培されている。

優良種苗供給体制の強化、日持ち性向上技術の検討、優良系統の選抜など、品質の安定化に努めている。



資料：農業生産流通課「花き産業振興総合調査」



資料：農業生産流通課「花き産業振興総合調査」

○　ラナンキュラス

ラナンキュラスは、令和６年の栽培面積が 2.8ha で、令和５年の出荷量は切花では全国２位となっている。令和６年の出荷額は約１億円で、生産性の高い県オリジナル品種の導入などにより、栽培面積は拡大傾向にある。

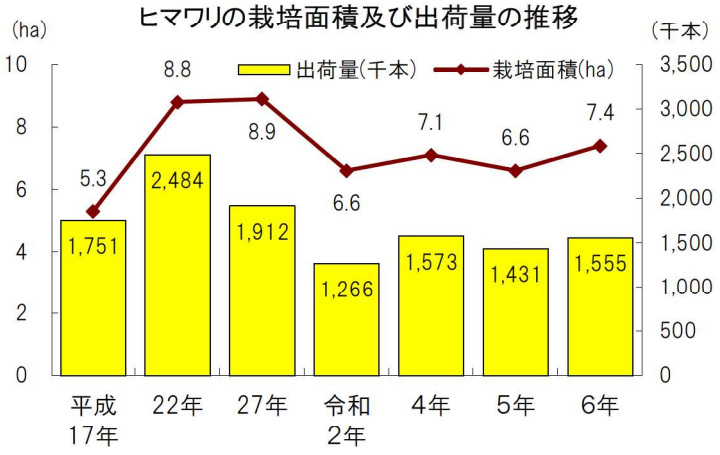
施設化率はほぼ 100%で、カラーバリエーションや日持ち性向上技術の導入等により、市場評価は高い。

○　ヒマワリ

ヒマワリは、令和６年の栽培面積が 7.4ha、出荷額は約８千万円となっている。

主産地は、三豊市と高松市である。

耐病性品種など優良品種の導入実証や省力的な管理技術などの導入により、品質の安定化や栽培管理の省力化を図るとともに、出荷作業支援にも取り組んでいる。



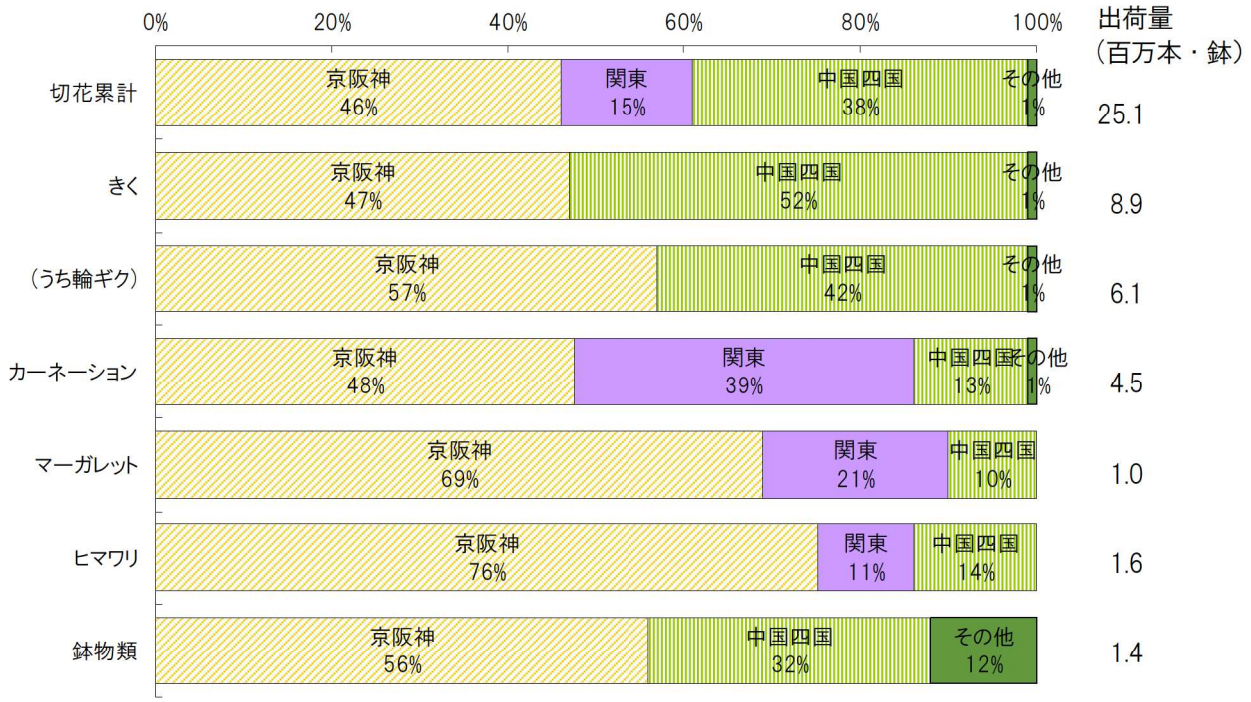
資料：農業生産流通課「花き産業振興総合調査」

⑦　花きの出荷状況

令和６年の花きの出荷数量は 27,460 千本であり、出荷先は京阪神市場が中心であるが、県内や近県などにも出荷されている。花き卸売市場の統合整備に伴い、流通の大型化が進んでいるが、主要品目以外の共同販売体制の整備は遅れている。

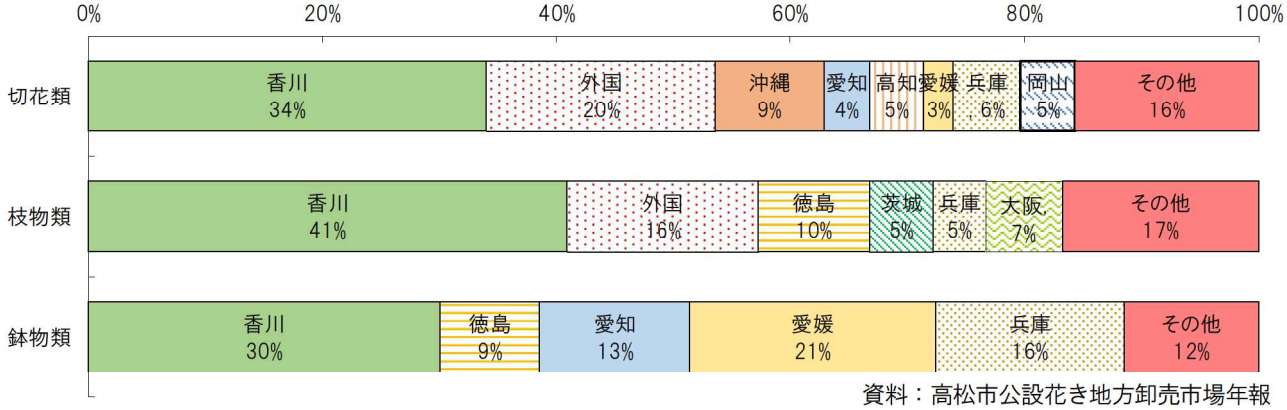
また、県内主要市場における本県産花きの入荷割合は、切花類が 34%、枝物類が 41%、鉢物類が 30%となっている。

本県主要花きの出荷地域別割合（令和6年産）



資料：農業生産流通課「花き産業振興総合調査」

花きの県内市場への産地別取扱量の割合
（令和6年・高松市公設花き地方卸売市場）



資料：高松市公設花き地方卸売市場年報